

2571  
1915  
65

# 統一



號六十九百第

御國體に就て

海軍大佐

佐藤鐵太郎君

我國將來の宗教と日蓮主義

大僧正 本多日生師

## 我國將來の宗教と日蓮主義

(五月二十五日日宗大學に於ける講演也)

大正 本多 日生 師

本月の十七日に開かれた地方官會議に内務大臣の懇切なる訓示があつた、其を見ると、我國現代の思想界に西洋諸國の思想が益々侵入して来るに従つて、一層我國建國の精神や國家思想の特色を一般國民に涵養する必要があることを述べて、第一には敬神の風を起し神社の修理を行ひ神官の養成に努むべきことを説き、第二には佛教が從來我國民思想を涵養して來たことは勿論であるが、將來に於ては尙一層宗教家の努力に俟つべきものが多いから、其心得を以て宗教に對し、宗教家を遇せねばならぬと云ふことを訓令されてある、第三には地方改良に就て、第四には救濟事業に就て、第五第六第七第八等は地方行政や治水策等に就てそれゝの訓示があつたが、其主なるものは思想界の事に就てである、是れ決して内務大臣一個の意見ではある

日蓮上人云く

抑々佛法を弘通し群生を利益せんには先づ教機時、國教法流布の前後を辨ふべきものなり又云く  
予か法門は四悉檀を心に懸て申すなれば、強ちに成佛の理に違はざれば且く世間普通の義を用ゆべき歟、然るに法華經と申す御經は身心の諸病の良藥也。

まい、之を内務大臣一個の意見とすれば、深く注意すべき事ではないが、恐らく之は日本政府を代表したものであろう、果して然らば現政府は國民道德の涵養と國民思想の啓發とが、宗教家の力に俟つ所が多大であると云ふことに気がついたのである。

明治維新の當初より今日に至る迄の政治家は宗教家を以て殆んど無用の長物視して居た、社會の進歩にも國家の發展にも宗教は何等の關係する所なく、宗教の盛衰興廢は國家の消長とは些の關係もないものとして信するも可、信せざるもの可と云ふ態度であつた。然るに如上の訓示によつて見ると、政府は從來の政策の誤つて居たことを反省したものと云つてよい、是れ國家に取つても寛に喜ばしいことである、と同時に宗教家の責任は愈々重くなつて來たのである、何故ならば、國家や政府が度外視して居た間は、宗教家は己自身としての責任はあつても、國家や社會の上からは何等の責任をも帶びて居なかつたのである、だから勝手な布教傳道をしても、自由な信仰鼓吹をやつても

別に差支はなかつたのである、處が政府が認めて宗教に信頼するやうになり、地方官が進んで宗教を獎勵するやうになつて來れば、從つて宗教家も布教に傳道に非常に努力を要するので、更に布教の教材を撰み感化の方針を確立すべきである、官吏の精神や態度など云ふものは一種別なもので、上から命令や訓示があれば唯々として之を遵奉するものであるし、又政府としても今年出した訓示を來年取消すと云ふことはなからうし、年を逐つて國家社會が宗教の効力を認めて來ることは略ほ豫想される。

そこで、宗教家の責任は益々重くなつて來るし、宗教の性質も愈々吟味せなければならなくなつて來る、宗教が度外視されて居た間は其利害も甚いが、重要視さるゝに及んで國家社會に及ぼす影響も大きく、從つて宗教の性質が國家社會と相容るゝものでなくてはならない。

古來からの佛教傳播の我國の歴史を見ると、時に隆盛を極めたこともあつたが、其場合には冥福を祈るとある、されば反面より見れば迎合や間に合せよりは遙かに増しである。

だから將來の宗教は、考察點を新にして如何なる性質を取らねばならないか、更に如何なる性質を有し、如何なる素質を具へ、如何なる方法に依て宣布せらるべきが、其標準を定めなければならぬ、宗教は元本質は不變であるが、其運用方法は時に依り處に應じて多少異つて来る、効果を顯はす上には順應は免れない其處で其標準に就て、國家の上からも論じて見ると、將來の宗教の要素は少なくも次の五ヶ條を擧げることが出来る。

第一には理想と現實とが根本的に融合せられて居る宗教

第二には最も善く我國體を擁護する宗教

第三には最もよく我國民性を發揮する宗教

第四には智德を兼備して國家の進歩を翼賛する宗教

第五には世界の各宗教に比較して優に卓越せる宗教以上の五點を將來の我國の宗教の要素として見るべき

か、追善菩提だとかの爲に盛んだつたので、國家觀念や國民道德を涵養するに必要だからと云ふので盛んであつたのではない、然るに現代及び將來の宗教は、國民道德の涵養とか、國家思想の啓發とか云ふ新しい必要によつて發達をなすものである。

夫故に、今後の宗教は能く我國民性と融合したものでなくてはならない、在來の我國の佛教は、我國民性と同化したと云はれて居るが、其融合の方法は完全でない、將來の宗教は、融合方法は過去に其模範がない今迄の同化は皮相的である、最も日本に來てから幾分現實的國家的となつたかも知れないが、それは迎合的便宜的であつて、根底的本質的の同化でない。

現代の思想が動搖して居るの、危機に迫つて居ると云ふが、この思想は善良ならずとも決して間に合せ的ではない、國家とは何ぞやとか、人生とは何ぞやとか何故に宗教は必要なかと、深刻な根底あるものを求めて止まないのが現代の思想である、適當なる解決を求めて得られないので、遂に種々の邪道に陥るのである。

第一には理想と現實とが根本的に融合せられて居る宗教でなくてはならない、現實を離れた理想は空想で迂遠なものである、又理想を離れた現實は多く陥劣な卑しいものである、拜金主義や自然主義は理想を捨てゝ現實に走せ、現實に醉つたものである、理想と現實との融合は、政治の上にも文學の上にも必要であるが、殊に宗教は此點に於て周密なる考察を経なければならぬ、融合は根本的本質的のものでなくてはならぬ、迎合的便宜的のものでは將來は役に立たないと思ふ、宗教として高遠な理想と现实的な現實とが根本的に融合して居るものは餘り見當らない、其時の都合で作られた便宜的の融合では、將來に於て人を救ひ世を導くことは到底不可能である、然るに之に就て一二異論を挿む論者があるから、其實際に就て之を明瞭にしやう。

或論者は次のやうなことを云つて居る、世間の人は現實に重きを置くから、宗教家は理想に重きを置いて

か、追善菩提だとかの爲に盛んだつたので、國家觀念や國民道德を涵養するに必要だからと云ふので盛んであつたのではない、然るに現代及び將來の宗教は、國民道德の涵養とか、國家思想の啓發とか云ふ新しい必要によつて發達をなすものである。

現實を離れて未來を教へ、肉を捨て、靈を説けば可い、此配劑によりて社會は進歩し國家は發展する、西洋でも世間は正義を重んじ、宗教は愛を重んずるので社會が巧く調和して行く、天體でも、地球の遠心力と求心力とで權衡を保つて安住して居る、人心は偏れるものと偏れるものが融合して調和するのである、水は水として冷たく、湯は湯として熱いのが可い、と恁うである、然かしこんな調和は誤つたものである、何故なら此説は教ゆる者は片輪でも、受けの方がしつかりして居て之を調和して受けければ可いとするのであるが醫者が薬の材料を與へて、患者が配合して飲むのなら、患者は醫者以上でなくてはならない、社會が調和し配剤するのなら、宗教家は必要ないことになる、此説の間違つて居ることは多言を要しない、宗教が單に理想に走れば非國家的となり厭世的となり世の進歩と相反する、又單に現實に偏すれば、迷信を助長し、卑俗に流れる、だから宗教自身に於て理想と現實とが根本的に融合して居なければならない。

(5) で間に合はないから、後には二諦相資とか、王法爲本とか、信心爲本とかと說いて、理想と現實との融合を計つて居るが、淨土教と云ふ名稱が既に承知しない、此世を穢土として他方の淨土で修行するが此宗の本領である、法然の選擇集にも此世は鼠狐々々にして、先きの世を希はねばならぬと云つたやうなことを說いて居る、日蓮上人は之を許破して「極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず」と仰せられてある、實に痛快なる批判である。

次に真言宗の立場を見ると、教に顯密を分つて、密勝顯劣として、顯教を捨て、密教に依つて居る、顯教は釋迦が人を相手として說いたものだから劣とし、密教は大日法身如來が金剛法界宮に於て、人にあらざる菩薩を相手にして說いたものだから勝とするのである。若し此世の人に解らぬ宗教なら、いくら勝れて居ても此世には用のないものである、實に真言と云ひ密教と云ふは、其根本は理想にのみ走つて現實を無視した無價直極まるものである。

又或人は次のやうな説をなして居る、日本の國民は現實的の特性を有つて居る、だから佛教が幾ら理想に走つても、國民が之を現實化して丁々、之れが國民の偉大なる同化力である、と之は宗教の本質を見ないで、只空想で捨て上げた説である、宗教が但幸制的のもので、注ぐ油か、腫物に貼る膏藥のやうなものならそれでも可いが、それは決して宗教の本領ではない、何處までも人性の根底に入つて人を導き世を濟ふ標的とならなければならぬ、國民の名教德教とならなければならぬ、斯く何人も宗教に依らなければ真正なる意義ある生涯を送ることが出來ないと云ふやうに重要なものであれば、國民性の融合同化を俟つて居るやうな氣の長いことは云つて居らるべきものでない、宗教の本質其自身に於て理想と現實とは根本的に融合調和されて居なければならない。

理想と現實とは、佛教の語で云へば眞諦と俗諦とである、此二者は相依り相扶けて行かねばならないものである、だから厭世的であり非國家的である、が其これで居なければならない。

次に禪宗の立場を見ると、本來無一物何れの處にか塵埃を引かんやと云つて居るが、本來無一物と云ふことは現實を輕視して理想に走つた好標本である、之を辯護して活禪などと云つて居るが、根本的には理想と現實とは少しも融合が出來て居ない。

要するに此等の諸宗は根本教義に於て既に理想と現實とが融合されて居ない、今日以後の宗教としては價直なき無用のものである。

今少しく人身觀、宇宙觀、超人觀に就て述べて見やう、此三は次第の如く佛教で云ふ衆生法妙、心法妙、佛法妙に當る。

淨土宗に就て云へば、彼れは人身觀に於て人間を賤みて罪雲の凝團だとして居る、日蓮上人の當體蓮華とは遙かに異つて居る、宇宙觀に於ては、此土を穢土として他方に淨土を求めて居る、日蓮上人の娑婆即寂光とは雲泥の差である、又超人觀に於ても、釋迦を應身とし彌陀を報身として、此土の釋迦を捨て、他土の彌陀を念するのである、生みの親を捨て、他に親を求むる

やうなものである、以上の三に於て既に理想と現實とは融合されて居ない、それを融合しやうとして二諦相資などに回護して居る、今の社會主義者や自然主義者は、皆惡むべき結果を來して居るが、其道程に於ては至極眞面目なもので誤魔化しはない、不禁慎の政治家や固陋なる宗教者よりは遙かに深い考察を經たものである。

日蓮主義は如何んと云ふに、諸法實相を説き、或は世間相當住等と説ひて、諸法と實相とが玄々妙々に融合されて居る、實に世界の思想界に於て、最も卓越したる宗教である、法華經壽量品には非如非異不如三界見於三界と曲玄なる妙理が説いてある、こんな開顯の妙義は法華經の上には到る處に顯はれて居る、日蓮上人は智慧亡國書の中に、

或智者は世間の法より外に佛法を行す、世間の治世の法を能く心得て候を智者とは申すなり

と申されてゐる、世間を離れて佛法を行するのは間抜けの智者である、眞の佛教は世間を離れたものでない

際の活用の上に於て信仰的でなくてはならない、則ち「日蓮が弟子となつるとも、日蓮が判を持たざらんもののをば御用ひあるべからず」

であつて、幾ら唱題修行をして日蓮が弟子檀那だと威張りた處で、上人の御心に契はなくては駄目である、日蓮の判を持たざらん者と仰せられた處に甚深の妙味がある、又最蓮坊に與へられた御書には

本有の寂光土へ晝夜に往復す

と申されて居るが、此往復と云ふことが實に面白い、吾々は晝夜に寂光土に往つたり復つたり、佛になりたり凡夫になりたりして居るのである、演壇に立つた時は如來の使である、錢湯に行つた時は凡夫である、錢湯に行つて背を流して貰ふのに、自分は如來だと頑張りたつて仕方がない、それでは巢鴨行である、往つたり來たりするのが可いので、往き詰めのは怪しい、以上のように、日蓮主義は人身觀に於て、佛を遠きに求めず、現實にも醉はず、禪宗のやうに厭々に學者振らす、現實と理想とが巧く融合されて居るのである、

健全なる佛教が即ち眞の佛法である、又上人は本尊鈔の結文に

天晴れば地明かななり、法華を讀る者は世法を得べき歟

と仰せになりて居る、法華を學ぶことは現實に健全なる活動をなすものである、實に法華經は理想と現實とが完全に統一せられたものである、此意味は上人の主義と人格の凡てに於て發揮されて居る。

先づ其人身觀に就て言へば、當體義鈔の中には本門壽量の當體蓮華の佛とは日蓮が弟子檀那等の中の事也

と申されて居る、が日蓮上人の弟子檀那となることは事實に於て甚だ困難である、少なくも日蓮上人の御心に契つたものでなくてはならない、然るに但だ御題目を唱ふれば、直ぐ本覺の如來となり妙覺の佛となりたりするには不透明の説である、斯う云ふ風では神宗で云ふ謂已均佛と違ひない、餘りに寛容過ぎはしないかと思ふ、要するに理窟の上だけでは可けない、實に

次に宇宙觀に就て見れば、安國論の中には  
三界は皆佛國也、佛國其れ衰へん哉、十方は悉く  
寶土也、寶土何ぞ壞れん哉

と申れてゐる、本質から云へば三界は佛國であつて、世に正法が流布し、人に信仰が充溢し、諸乘一佛乘に歸すれば、吹く風は枝を鳴さず、雨は壞れを碎かないのである、又南條鈔には

彼の月氏の靈鷲山は本朝此身延の嶺也

と仰せになつてゐるが、身延山と云つても牛も糞をすれば馬も糞をして居る、然し一度び日蓮上人の信仰の精神に映すれば、初めて本朝の身延山も靈山淨土と現はるゝのである、則ち理想と現實との融合を吾人の活きた信仰の精神の上に有つてゐるのである。

次に佛身觀の上でも、理想と現實とは完全に融合されて居る、大涅槃經の中に佛の最も偉い貴い處を一語で表はすには何と云へばよいかと云ふに、慈悲の心を以て世間に遊び給ふ、其處が一番貴い處であると云つて居る、尻を抓つて痛くないやうでは面白くない、蚊

も居り蚤も居るのが面白い處である、諸種の煩脛に悩  
まざるゝ、そこに眞の宗教がある、淨土に行つて修  
するやうなら、始めから止したが可い、花見に行つて  
臺所争するやうなら行かない方が氣が利いてゐる。

次に上人は佛教を見られるに人間中心であつた、眞言宗では大日や密嚴淨土を説き、淨土宗では彌陀や安養淨土を説いてゐるが、宗教は元來人間を離れて存在すべきものではない、何處迄も人間を本位としなければならない、上人は到る處に人間を中心として論じてゐられる、十八歳の時の御著作たる戒體即身成佛義には人を捨てゝの教は無益なり。

と申されてゐる、寔に人間を本位とする上に於て宗教は大切なである。

女房と酒うちのみ南無妙法蓮華經と唱へ云々  
と、此家庭團樂の間に即身成佛が出来るのである、燒芋より食へぬでも豆腐より味はえんでも、信仰に生くれば即身成佛である、こんなことを一々上人が書き遺  
實を離れず、而かも高遠な理想を語つてゐるやうで、何とも言へぬ感じのするものである、桃の節句に招ばれて行つて、桃の花を眺めながら白酒を飲むのに、ナマイダ／＼とやつたら實に滑稽な不調和なものである然し南無妙法蓮華經と唱へれば決して不調和でも滑稽でもない。

實に唱題は日蓮上人の高遠なる理想と激々たる現實とが融合調和されて居るものである、だから一遍の唱題にも慎重な注意を拂はなければならぬ。

第二には、將來の宗教としては最も善く我國體を擁護するものでなくてはならない、宗教は個人の慰安解脱を主とし、又平等思想を取るが故に吟味せざれば御國體を忘るゝ如き失態を演ずることがある、我國には建國の當初から儼然たる御國體がある、其中心は皇室であつて、皇室は恰も親の如きものである、上皇室の仁愛なる大御心と、下臣民の忠愛の精神とが結合して國體をなしてゐるのである、皇統連綿として萬國に其比を見ないのは、實に此喜ぶべき御國體によるのであ

されねば解らぬやうでは困る。

乃ち日蓮主義は、人身觀に於ても、佛身觀に於ても、將た宇宙觀に於ても、理想と現實とが根本的に本質的に融合統一せられた最も勝れたる宗教である。

尚ほ一言茲で注意して置きたいことは唱へ方である唱へ方にも耶蘇教の祈禱や、淨土宗真宗の念佛や、日蓮宗の唱題などいろいろあるが、耶蘇教でも真宗や淨土宗でも、其唱へ方が如何にも陰氣臭くて、今にも滅入り相である、淨土宗のナンマイダや真宗のナマイダアは側で聞いてみると、秋の暮方に懷ろには金は一文もなく寂しい入相の鐘の音を聞いてると云つたやうに、寂しく哀れつぱくて活々した處がない、全然現實と飛離れて了つてゐる。

然るに日蓮宗のはと云ふと、餘りに現實化し過ぎてゐる、其唱へ聲には自己の決心も勇氣も感謝も慈悲も、涼やかな心持も、いろいろの心持が融合され調和されてゐなければならない、貴い僧侶の唱へ聲を聞くと、其中には宗教的要素が巧く調和されて居て、激々たる現るゝ、皇室は實に仁愛の結晶であつて、仁愛を離れては皇室はない、又國民は忠愛の結晶であつて、忠愛を捨てゝは國民はない、皇室は毎自作是念の御思召を以て民を知食され、國民は常に一心欲見佛の思を以て皇室を仰ぎ奉り、茲に萬世不易の御國體が確立するのである、であるから、我國に於ては御國體に反する宗教は之を捨てなければならない、それで我國に起り若しくは侵入して來た宗教は、皆自宗の安全のために御國體に同化しやうとする、例へば嫁と姑とのやうなものである、嫁の中に、嫁入先きの家風に厭々ながら仕方なしに形式的に從ふのと、實際精神的に心から從ふのとの二通りあるやうに、宗教にも亦此二通りがある。

一つは、宗教は元來平等の慈悲を立場とするのであるから、國家の興亡とか國體の盛衰とかは眼中に置く必要はないが、國家と喧嘩をしては損であるし追出されは困るから、成可く窮として置かうと云つた宗教である、淨土宗の如きは機法と云つて、機に重きを置いて法を選ぶ、先づ懷と相談と云つた處である、懷の都合

で、蕎麥屋にしやうか、牛肉屋にしやうか、料理屋にしやうか、それともおでんの立食ひで我慢しやうかと云つた處である。易行易修など、威張りてゐるが、これは木賃宿主義で満足しやうと云ふのである。

二つには、日蓮宗のやうに根本教義に於て團體を擁護する宗教である。日蓮主義は淨土宗のやうに木賃宿で満足するものでない、完全なホテルである。教、機、時、國、序と宗教の五綱を説いて、根本的考察の上に國を入れてゐる。淨土宗のやうに機と法とばかりを説いて國を度外視して居るのは大に其趣を異にして居る。宗教は個人の救済に盡し平等の慈愛がなくてはならぬが、その當面の目的を國家の興立に置き、我御國體を教そのものゝ根本意義よりして擁護し上るもののが即ち日蓮主義の特色である。

佐藤大佐が其著『國防論』の中に、日蓮宗が最も善く國家觀念を鼓吹するものだと云ふことを書かれたに對して、淨土宗の僧侶大島某が國家觀念は淨土宗でも説く處であると辯じて、淨土宗の宗義を目茶〳〵にした。矛盾をして居る、國家の御祈禱をしたからとて、直ちに國家主義と見る事は出來ない。彼宗等は主義も主張もないでの、勝手の可いやうに何うでもなるのである、心から國威の宣揚を祈るの、國家の隆盛を希ふのと云ふのではない。

然るに日蓮主義は主義其ものに於て我大日本國を最も善く擁護するものである。是れ寔に上人の獨創であり卓見である。上人は日の東より出でゝ西を照す如く、我國の佛教も漸次西方に向つて流布するものであると云ふことを仰せられてゐるが、これは日本が世界の中心となり根本となるものだと云ふことを示されたのである。だから他の側より言へば、日蓮主義は國家と存亡興廢を共にするものだと云ふことが出来る。日蓮主義は實に日本の柱であり、眼目であり、大船である。故に日本主義となつた法華經は、日本の國威と共に一闇浮提に廣宜流布すべき力用を具へてゐるのである。茲で少し注意すべきことは、日蓮主義が國家を謳歌

其處で宗内の物議を起して之を罰しやうとなると、當局の言草が面白い、法然上人の大原問答からして誤魔化し主義だから、宗義を没却したからとて大島を罰する譯には行かぬ、と恁うである。そして愈々四十四年

から恁んなものは嚴罰すると云ふことになつた相である。其非國家主義なることは之を見ても明かである。今回の大逆事件でもさうである。真宗の高木顯明にしろ、禪宗の内山愚堂にしろ、彼等は立派に其宗の信仰を有つてゐたのである。日蓮上人は、

「國士亂れん時は先づ鬼神亂る、鬼神亂るゝが故に萬民亂る」

と言はれて居るが、彼等は真宗禪宗を離れて墮落したのではなく、其宗旨を信じてゐる其儘墮落したのである。宗旨其ものが既に之を導く接觸があるのである。真宗では教義の上では此土を穢土だとし、感化の上では現實を駄目だとして居る。實に社會の敵であり人類の敵である。真言宗の如きも、京都では皇室の祈禱をし、鎌倉では霸府長久の祈禱をするなど、隨分滑稽な

するからと云つて、勅語の前に御靈品が光を失ひ、天照大神の前に釋迦が價值を損すると云ふのではない、と云ふことである。上人は王法佛法と判然別にされてゐる。王法の上でこそ、勅語も天照大神も絶對のものであるが、宗教の上からは絶對無限のものではない、

宗教の上より言へば和光同塵で、天照大神、正八幡等は其本體たる本佛の現はれである。

先頃井上哲次郎氏が神道復活論を唱へて、他から傳はつた佛教や耶蘇教を排しやうとされたそつたが、若し佛教が印度から傳はつたものだから用ひることは出来ないと云ふなら、西洋のランプを用ひては可けないと云ふやうなものである。そんなことは到底問題として論すべき價値はない。

以上宗教の要素の中、第一第二に就て述べたが、第三第四第五に就ては又他日を期して之を述べることにする。

## 御國體に就て

(天晴會講演)

海軍大佐 佐藤鐵太郎君

又遠く歐羅巴の諸國を見ましても、又印度及中央亞細亞、西亞細亞方面の諸國の歴史を見ましても、到底高遠なる建國の精神ありとは認めることが出来ませぬ。羅馬や希臘の建國を見ましても、其の神話を見ましても、雖然たる怪物、若くは豪傑物語に過ぎませぬので幽玄絶対なる建國の精神などは、到底望むべき程度のものではありますと存じます。

如斯詮じつめて見ますれば、我帝國の如き、高遠にして雄大なる建國の精神を有し、且これを保有しつゝある邦國は、一つもないのです。

日蓮大聖人が、我帝國を以て、「日本は闇浮提内、億萬の國にも勝れたる國ぞかし」と仰せられたるが如きもまた「闇浮提第一の本尊此國に建つべし。」と唱へられたるが如きも、これら意味合に相違なかろうと存じます。加之この大聖德の醇化作用によりまして、

佛教の眞髓を發揮せられ、これと同時に、深くも我御國體と融和せられ、世界的大法輪を轉すべき寶土は、實に我大日本帝國にして、十方世界を精神的に統一すべき使命は、自ら我帝國にあるべきを宣傳せられ、進で舊佛教徒の悲觀的消極的觀念を轉じ、活動的積極的な新生面を開かれたのであります。儒教もまた殆んど右の如く、論語、千字文傳來の昔より、朱氏王氏の學に至るまで、一として我國人により醇化せられざることはなく、有德作王主義の儒教が忠孝本義に轉化したのであります、もしも聖人孔子をして、我日本國に生れしめたらんには、周祀を無窮ならしめんが爲に、三代を説くの苦心もなかつたので御坐りましよう、私如き末輩を以て大聖人を批評するは、誠に以て畏れ入りたることで御坐りますが、弘夫子の御説が唐虞三代に復舊するにありとすれば、自ら禪讓の結果を見るありますよう、衰徳の周はこの意味より見れば、一日も天子たるの資格がありませんが、如何せん支那には真正なる帝者がありませんので、不得止現在の周朝を永遠

我大日本國民は、驚くべき吸收力と消化とを兼有する國民となつたのでありまするが、是れ實に御國體の然らしむる處、神ながら靈敷あり、嚴として我等國民の頭上に監臨し賜ふの結果に相違ありませぬ。佛教の如きも各宗の教義殆んど我國に傳へられ、一として邦人の手により更に高遠幽妙の域に發達せしめられるものがありませんので、之を其本源たる印度と中華たる支那に比すれば、遙によく其の醇味を發揮せられ、且實行されて居るので御坐りまする、加之日本人は、之を以て満足することが出来ませずして、傳教弘法の大師は垂迹の妙解を以て、御國體と融合せしめられ、源空上人は、他力教を醸化して、日本淨土教を創められ、現世執着の觀念を轉せられ、親鸞上人の如きは、更に他力の法門を進めて、純他力の教を弘められ、斷然として尋常佛教の範囲を脱して、肉食妻帯の風儀を戒めて、社會と親しみ、これによつて世道人心を齊へんことを圖られたのであります。殊に日蓮大聖人の如きは、上行菩薩の化身なりと自覺せられ、蓋に國家的無窮ならしめんが爲り、盛に人道を説かれたので、其の意義に於て、到底徹底せざる處あるを免れないといふ私は信するのでありまするが、孔夫子は、不幸にも無上崇嚴にして絶対の德を備へらるゝ天來の君王ありて統治せらるゝ御國體の存在を承知致しませんので、有德作王主義の如き相對的理想を提起せられ、絶対主義と相容れざる帝道を祖述せられ、帝堯のなされたる過ちに、上達を施されつゝも、尙且周の祀を無究に傳へんとせられたるには相違なかろうと考へるのであります、もしも聖人孔子をして、假りに我神洲の存在を知らしめたらんには、果して如何なる帝道を祖述せられたでありますようか、抑もまた如何なる大歎喜を起し、我御國體を贊美せられ、其の國民をして、我日本國に臣事すべき大指針を與へられたで御坐りましようか、もしも大聖釋迦をして我日域の人たちせらんには、果して如何なる教義を以て、我王法を補翼せられたでありますようか、爾前四十年の御説法は如何に御處分あらせられたで御坐りましようか、世界的教法

たるべきは法華經の真髓の、我王法と融合するを看て、如何なる大歎喜を起され、過去にも生せず、未來にも滅せざる底の轉輪大聖王の日本國に顯在し賜ふて、感嘆せられたで御坐りましようか、恐らくは、法華經の弘道を上行の化身たる日蓮大菩薩に御附托あらせらるゝ迄もなく、既に世界的王法と世界的教法と相融和しつゝ世界の人類を統一的に教化あらせらるべき、大事業を創辦せられたでありますと、潛越ながら信ずるので御坐ります。

以上御國體の大體の御様子に就て、申上ましたので御國體の本尊たる御稜威は、常住不滅であらせらるゝので、丁度壽量品に御開顯の本佛と、全然融合あらせらるゝ如く、拜せらるると云ふ意味合を、申上た積りでありますと、更に御國體と我大日本國民との關係に就き、少々申上の積りに御坐ります。

その前に、一寸申上ることが御坐ります。世間には、兎角一種の相對的な推理に基きまして、我御國體に關する問題を、解釋しようと試むる人がある様に位繼承の絕對なるべきを、御悟りにならぬ理論を其の間に挿み、強て長幼の分を正さんとせられ、それが爲、忠誠なる國民をして歸着する處に苦み、三年の間うろ／＼に過させたと云ふのは、一同合點參らぬ話しあります。開化天皇の同母兄にあらせらるゝ大彦の尊の開化崇神兩帝に對せられたる御様子、殊に武埴安彥の難に對する誠心誠意、四道將軍としての御偉蹟などは實に我皇統を擁護し奉り、御稜威を萬々歳に傳へます。れる、大忠の精華であらせられますので、その間に一點の私の御考をも挿ませられずして、皇位繼承の絕對なるを表せられたるは、誠に以て恐入りたる次第に御坐りますが、それから又人によりましては、我國體は、神武天皇によりて創辦せられたる如く信する人もありますので、從て無始無終の意義を疑ふが如き意思を漏すものもある様に見受けられますと、これもまた乍畏驚くべき誤りでありますと、萬世一系の御皇統を、我々臣民に拜せしめられ、此立派なる理想的國體を御創建あらせられたるには、天照皇太神に

存られますが、これは根本的に間違てゐると私は考へます。或る學者の説に、神武天皇様が御東征の際に、長髓彦の守り立てゝ居りました、燒速日ノ尊の御子は、天照皇太神の御爲には、寧ろ正系にあらせらるゝが如く見へる。瓊杵の尊は、正しく燒速日の尊の弟君にあらせらるゝと云ふ事であります。成る程これは一理ある議論であります。成る程一理ある議論でありますと、如何にしても議論と云ふ範圍を脱せぬので、皇位繼承の絕對なるを知らざるの致す處でありますので、皇位御繼承の言儀は、決して長幼とか徳不徳と云ふ點にはありませずして、たゞ父君の御鑑識を以て、天日嗣を定めさせらるゝので、その間には決して何等の議論をも挿まないのが、皇位御繼承の言義で御坐りますので、議論を以て變更するが如きは、絶體の意義がないのであります。菟道の稚郎子が、儒教思想に御感染遊ばされ、強て長幼の別を立てんと欲せられたのは、長幼有序と云ふ教への方が先帝の御遺勅よりも重しと思召されたる誤でありますと、要するに皇あらせらるゝので、神武天皇の御代に至りまして、凡ての事が整然と建てられ、整確なる史傳を残し賜へるに過ぎぬので、乍畏 今上皇帝が我大日本國に新紀元を開かせられたると、同一の意味に拜察致しますので、御稜威の淵源は、天祖大御神の無上幽玄なる大俊徳に起り、御國體の御宣言は、天孫御降國の御詔勅によりて定りたるものと拜察して謬はりませぬ。

申すも畏れ多きことに御坐りますが、何か此頃に至りまして、南北朝に關する議論がありまして、甚しきに至りましては、議會沙汰にまでなろうとして居ると云ふことでありますと、果して事實とすれば、餘りに物事を辨へぬ事であると私は考へます。これ實に御國體殊に皇位繼承の絕對なるを悟らざるの過であると、私は信じます。私は元來南北兩系のことを認めて居りませぬ。また御國體上決して存在を許さぬ思想であると考へて居ります。甚しきに至りましては、我皇統は北朝の御血統であらせらるゝなどと放言するものもある。これ等の論者は、北朝と南朝と如何なる

點に於て御血統が相違して居ると言ふのであらましよ  
うか、私はこゝに斷言致しますと共に、天祖太御神  
の御末また正しく後嵯峨天皇の御子孫であらせられ、  
其の間に何等の隔てがありません。殊に驚くべきは、  
天に二日なく、國に二王なしとの大意義を、如何に解  
釋せらるゝのでありますか、我日本國に二人の天  
子ありとの意義が何によつて生するのでありますか  
か、隣國や、諸外國の如き國體を以て、我無上崇嚴な  
る唯一無二の靈國を推しはかり、政權のある處は即こ  
れ天子のある處なりなど論するならば、それは實に  
御國體を知らざるの致す處であります。乍畏我日本國  
には決して二人の天子を戴きたる歴史がないのであり  
ます。後醍醐天皇様が天日嗣を受けさせられたのは、  
疑もないことであります。御後は何と云ふ天子様  
が御なりになりましたか、後醍醐天皇様が、となたに  
天日嗣を御譲りになりましたか、その後、時世の變遷  
により、後龜山天皇様より、正式に天日嗣を後小松天  
皇様に傳へさせられ、こゝに初めて海内一統の芽出度  
が御話が、夕々躊躇にはいつた様な具合でありますか  
らこう云ふことは、先これ位にしまして我國民と御國  
體に關する意見に移らうと思ひます。

以上申述ましたる處は、御國體に關する私見の大要  
に御座りますが、我日本國民は果して、この御聖謨  
を輔翼し奉り、これを無究に傳へ奉るべき資格を備へ  
て居るで御座りましょうか、これは中々疑問で御座り  
ましようと考へます。さりながら我日本國民は大德  
醇化の御影によりまして、何事をも融和し、更に換骨  
奪胎して日本のとなすべき特性を有する偉大なる國民  
であります。然るに外國人等は我國民を評して、模倣  
に長じ、創建に短なる國民なりと申しますので、我  
同胞もまた之れを聞て愧かしそうにして居る人もある  
のであります。小供の學校にはいりまして、其の學識を  
進めますのは、悉く皆模倣であります、孔子様でも  
御釋迦様でも、耶穌でも、マホメットでも、其他古來

御代となりましたのでありますので、この間のことをよ  
く考て見れば、南北兩統などの思想の成立べき理由は  
あります。假令如何なる事情により、御立になります  
しても、天日嗣の御傳承は、絶對であります、決し  
てくだらぬ理屈などを挿むべき次第のものであります  
。後醍醐天皇様より直接に御傳へになりましたる事  
實がありません以上は、決して天日嗣ではあります  
ので、後小松天皇様に至りまして、初めて所謂北朝系  
統に御傳へなり、こゝに初めて海内一統の實を擧げ  
ましたので、その以前に於て尊氏直義等に従ひ、忠勤  
を擢でたる人々は、大義名分上氣の毒ながら遁臣であ  
ります。世の學者の一派が南北朝兩統を別系なりと心  
得るものありとせば、少くも我御國體の絶對なるを知  
らざるの致す處、誠に以て氣の毒の至りに存ますると  
同時に、誠に以て淺間敷思想であると私は考へます  
。兎に角世の中は、理屈にのみ走り、その間に極端に  
厭ふべき思想を養成するのは、苦々敷次第であります  
。これ等の意義に關しては、今少し申上度様に存じます  
より大學者大英雄は、悉く模倣の爲にエラクなつた人  
々であります。孔子の仰せられたる通り、述而作信而  
好むと云ふは、此間の消息を證據立て餘りありと思  
ひます。この點より考て見ますれば、孔子の教は勿論  
創作であります。八萬四千の經文でも、新舊約でも  
皆悉く獨創のものではありませんので、皆悉く模倣の  
上に、他の模倣を重ね併せて更に進で一生面を開いた  
のに過ぎぬものと察するのであります。科學上の進歩  
とても皆この通りで、凡そ世間にあつて重寶がられて  
居ります。色々の品物機械等は、一として模倣の發  
達でないものはありません。如何に革新なる發明と申  
しましても、どこかに模倣する處がありまして、基礎  
をなさざるものはありません。この點より考て見ます  
れば、大に模倣するは大に創建する所以で、深く模倣  
するは模倣する丈け。其の創建の偉大なるを豫言する  
のであります。決して何も愧る處はないのであります  
もし模倣の局面を廣く致しまして、治く師匠を求めて  
研究を重ね、必ずしも獨創と發見とを急がざること釋

尊の如くに致しますれば、終には<sup>勢せせ</sup>彭然たる大創見<sup>さうけい</sup>大發明<sup>だいめい</sup>を大模倣<sup>だいもほう</sup>の裡に發し、かの區々たる小創見<sup>ちうけい</sup>の到底企て及ばざる處を成就することが出來ます。が、我日蓮大菩薩の如き大偉人は則ち如茲經路<sup>じゆききよ</sup>を通られて、彼の如き大業をなされたに相違なかろうと信じます、要するに我國民が大なる模倣的性格<sup>はつとうせいせき</sup>を備へ、而かも驚くべき諒解力を有するは、古來歴史の明證する處に御座りますが、先第一に朝鮮文明がはいりましたのがはじまりに御座ります。

此際に於ける一般國民の様子は、明白に分り兼ます。が、前にも申上ました通り、<sup>うきのひ</sup>范道稚郎子の如き御方が御出になりまして、儒教思想の判断を皇位御繼承の場合に迄御挿みになり、授受共に絶對なりとの意義を悟られず、理論を其の間に夾で長幼の分を正さんとせられたのであります。が、これ實に朝鮮傳來の儒教思想の影響<sup>あうちやう</sup>の甚だ大なりしを證據立るものと、私は信ずるのであります。が、しかし日本人は假令一時は教を他人に受けましても、其の本來の立脚地を忘れる國なつたのであります。が、この思想こそ實に我日本國民の仰ぐべき、我御國體の精華<sup>せいげ</sup>に相違ないので、我等民族の結合力の強勢なり、實にこの精神より發する御威光の致す處であります。然るに世間にはこふ云ふ説をもつて之れを國民に説かうとして居らるゝ方があります。其説によれば、抑我國民と皇室との御關係は、我皇室は、我等臣民にとりて君主にして、宗家を兼て居らるゝのである。譬へば、子弟及孫の父母と家長に對するが如く、我等日本人は上下共に其の祖先を同するが故に、和衷協同<sup>わくとう</sup>の精神は、殊に堅實<sup>けんじつ</sup>であります。加之我帝國は皇室ありて後に成立たる國家にして、國家ありて後推戴したる皇室ではあらせられぬのである。されば君國に關する一種靈妙<sup>しうじやう</sup>なる思想は、我皇室と國家とを一體とし、其の間には何等の懸隔<sup>けんごく</sup>もないのは、今更論するを待たぬのである。併しながら是の議論は決して眞髓を得たるものとは考ることは出來ませぬ。

民であります、之れが爲め韓國到來の文明は忽ちにして融和せられ速かに之を凌駕するに至たのであります。原來支那文明の大本たる儒教は、其の主眼とする處、治國平天下にありますので、其の主義は既に前にも述べました通り、有德作王の四字に外ならぬのであります。人道の大本は祖先を祭り、長者を敬し、弱い者を恤むの點に取り盛に禮學を起して、其外を齊へ密に仁義孝悌<sup>じんぎこうてい</sup>の道を講じて、精神的陶冶<sup>じゅうじやく</sup>を行はんとするのであります。が、未だ至大至高なる絶對位に向つて、其の身と心とを捧げなければならぬと云ふが如き意義を知らざりしものと見ゆるのであります。要するに支那文明は、箇人主義にあらざれば、箇族主義<sup>こぞくしゅぎ</sup>であります、一も嵩高なる大犠牲主義<sup>だいぎせうしゅぎ</sup>を認むることが出來ませぬ。然るに儒教の我國にはいりまするや否や、有德作王主義の忽ちにして、其の影を没しまして忠の字に、支那傳來の思想にては到底解すべからざる意義を附まして、純然たる日本の忠孝主義となつて顯はれ、醇乎たる大和民族<sup>だいわみんぞく</sup>の思想はこゝに最立致し、萬代不易<sup>まんだいふりき</sup>と我等日本國民は、如是<sup>じよぜ</sup>單簡<sup>たんかん</sup>にして而かも平凡なる、二三の考察を以て満足することが出來ませぬ、少くとも、今少し切實に幽遠なる關係を有して居なければなりません。且又我々は決して其祖先を皇室と同人すと云ふが如き不都合なる考を以てはなりませぬ、我々の祖先はどこまで、皇室の忠臣で君臣の分は確然とあつたのである。假令皇室の御血統<sup>ごけど</sup>を辱<sup>はず</sup>するものと雖も、一たび臣列<sup>しんりゃく</sup>にはいりましたる以上は、天の高きより、この地上に降つたと同様、もはや其の關係は絶對に君臣となつたのであります。我々は其の始めて臣列にはいられた御方をこそ祖先と致しまするので、桓武天皇九代の後胤など云ふのは、誠に以て畏れ入つた次第で、我々臣民の口にすべき處ではないので、この邊の關係を知らなければ、決して御國體の何物なるを知ることが出來ませぬ。從て我等の祖先は御皇統に對し奉り、無二の忠臣で有つたのを誇るべきであるので、日本國民が、其祖先を同人するが故に、其の結合堅實なりと云ふが如きは、我雄大なる御國體と相容れざる

解説であります。畏くも絶對位を中心として確立され  
たる理想的國體は、決して如斯く偏狹なるべきもので  
ある世界各國が、或は有德を王とし、或は富強を君と  
し、或は年限により、或は盛衰により其の元首を變へ  
るのは、到底天の道理に協はぬ。苟も相對の意義を含  
む主權者は必竟爭亂を起すべき媒介で、到底世界の平  
和を維持し、人類の幸福を催進し且之を無究に傳ふべ  
き資格を有しては居らぬ。どうしても天來君王統を  
萬世に垂れたまひし開闢以來、「君臣之分定矣、以臣  
爲君、未之有也」天之日嗣立皇緒」と宇佐八幡の仰  
られたる如き。神聖にあらざれば、世界の最高主裁者  
として奉戴すべきではないと云ふことがはつきりと分  
り、我々國體の崭然として萬邦に冠たる所以を了解致  
し、甚深微妙なる靈徳を拜して、無上の大歡喜を起し  
身心を捧げて、我大君の御膝下に歸依し奉るものがあ  
りさへ致しますれば、其の民族の何たるを論せず、其  
の色合が黒であらましょが、紅であらましょが、  
目を驚かしまするので、我同胞はまたもや一種の「ハイ  
カラ」心を起すと同時に、自ら凌むるに客ならざる  
我邦人の偉大なる本領を顯はし、全力を傾注して其道  
を傳ふることに力めて居るのであります。元來我邦人  
は一種の「ハイカラ」癖を有し、己を空みて人に學ぶ  
に長するは、古今歴史の明證する處でありまするが、  
朝鮮文明を見ては、無上の敬意を拂ふて之を學び、支  
那の文明を見ては寧ろそれ以上の敬意を拂ひ、文物制  
度悉く其の風にならひ、佛教に接してはまた更にそれ  
以上に尊敬の意を拂ひまするのでありまするが、何に  
致せ何事をも融和すべき國風は、「所知」を主義とせら  
るゝに、大徳の下に化育せられて嚴存致し、各種方面  
に各種の思想が凝滯なく行はれ、決して舉國相帥て同一  
主義に狂奔することがありませんので、つまりは小  
波瀾のまゝに沈靜して、極端に奔ることなく巧に中道  
を歩んで小波動をなしつゝ進むのでありまするから、  
從てこれ等文明の得失を看破するの眼識もまた高ひの  
であります、從て遂にこれを融和し、更にこれを醇化

乃至また白人でありましょが嚴然たる大日本人とし  
て、少しも差支がないのでありまする。この點に於て  
も、妙法華經と御國體との大融和が彌々密接に融和す  
る如く、考へられまするので、提婆品に於て、提婆達  
多と八歳の龍女の成佛を説かれたるが如き、五百品人  
記品等に於て、無數の聲聞、學無學に允可を與へられ  
たるが如き偉觀は實に我御國體より自然に發すべき光  
明と相考へまする。則白人黒人の別なく、また一度は  
我御國體に仇せるものと雖も、また一度は增上慢の考  
を起して、我御國體を誇りしものと雖も、悉皆同様に  
我御皇統の赤子として御尤可を與へらるべき道理であ  
ると私は信するのでありまする。

我等日本國民は前にも申上ましたる通り偉大なる性  
格を備ふる國民であらねばなりませぬ、先第一に朝鮮  
文明を輸入して、これを融和し、次に支那文明と佛教  
とを輸入して、またこれを融和致したのでありまする  
が。今度はもう一西洋文明が殘つて居りまするばかり  
であります、西洋の物質的文明は其の輪美の美殊更人  
し、逐には挽骨象踏して仕舞ふのであります。今代の  
先覺者も、西洋文明に對しては一時心醉されたる如き  
有様でありましたが、何に致せ心醉する程であります  
るから、其の學を傳ふることにも勉強でありますた爲  
に、其進歩實に驚くべく、西洋人をして驚嘆措く能は  
ざらしめたのでありまするが、この眼前の有様を一見  
したるのみでは、其の變化誠に驚くべくに相違ないの  
でありまするが、西人の驚きましたには、我日本人を  
以て一概に弟子の列に加て考へたるの過ちに御座りま  
するので、我邦人は決して小學校の門を叩くべき兒童  
ではないので、譬へば釋尊が迦葉の問を叩き、孔子が  
老聃を訪いたる類でありまするので、西洋人の驚嘆す  
るのは、余り我邦人の學歴を知らざるの結果であると  
私は信じまする。然るに西洋人は、心に東洋文明を尊  
敬するの念慮が御座りませんので、先如何様に考へて  
見ましても東西兩様の文明をかみしめて、之を融化す  
るの資格がありませんが、我邦人は既に東洋文明に養  
はれ來りたる上、今又西洋文明を輸入し、著々として

これを融和し、かみしめつゝありますのでありますから、もし果して歴史は既往の事實を繰り返すものとせば、朝鮮支那の文明に同じ久しからずして西學もまた醇化し、換骨奪胎して純然たる日本の西學を陶成しこゝに東西兩洋を統一するの大偉觀を示すであらうと考へます。古來聖賢が各方面の碩學を師匠として、其の學を研究致し十分に之を消化して後、諸碩學の夢想だも及ばざる大光明を發するのは、殆んど皆然りと申すべき有様でありまするが、大聖釋迦がありとあらゆる外道の學を修め、然る後無量無邊の大功德を顯はし、大法輪を轉じ賜ひたるが如し、凡そ學問の方面が廣く且よくこれを體究したものは、終に大偉人となりまするので、日蓮大聖人が如斯大偉人とならせられたるも、二十餘年間或は鎌倉に、或は京及叡山に、或はまた奈良及天王寺其他國々の寺々に就き、各種の法門を究められ、こゝに各宗の及ぶべからざる大見識をえられたに相違ないので御座ります。我大日本國民が、今や併て東西兩學を完り、他の東洋人にも望み難も御座りますが、これは誠にいはれなき心配に御座りまして、私はこれこそ我國風の偉大なる處で、我國には偏狹なる日本の特色と稱すべきものなく、木履も革靴も、燕尾服も羽織袴も凝帶なく流通しつゝあるが中にも一種の氣魄あり、嚴然として主張しつゝあるが如き壯觀は實に我國民の消化力と吸收力の大にして、而かも一端に奔馳せるを證すべき好指針とも見るべきもので、是れと同時に我國民の偉大なるを證するのであると私は考へます。この鹽梅の特に面白いのは、精神上のことで御座りますので、我日本國は前にも申上たる通り一種靈妙なる特性を有しますので、儒にまれ、佛にまれ耶蘇にまれ乃至所謂神道にまれ、流通全く自在にして、一も國教と稱すべきものなし、反て殆んど無宗教の如き觀あるは、外人の等しく怪む處に御座りますが、其の實神ながらの靈教あり、如何なる教義とも融合し、而かもよく之を醇化し換骨奪胎して臣隸たらしむるの大靈德を備ふる大宗教あるの致す處である。この神ながらの靈教は、我御國體の無始無

く、西洋人にも及び難き底の域に進みつゝあるは最も注意すべき事柄であらうと私は信するのであります。殊に體究し難い精神的修養を先きにし校究し易き科學を後にする的好運に會したるが如きは、實に天與の大幸に相違ないので御座りますが、而かも幸福は是れ皆絕對幽玄なる御國體の賜に御座りますので、實に我が帝國が三千年の間に於いて、一度も外國の壓迫を受けず、他の諸國民の夢想だも及ばざる太平和を享有し得たるの結果であるうと信じます。此一事をもちましても、我帝國には一種の玄妙なる靈力あり、何事によらず萬事萬端に支配し賜ふのが明白なる様に考へられます。人によりては我日本の風俗に特色が御座りませずして、例へば禮服と申しましても、燕尾服も羽織袴も御坐りますれば下駄も靴も凝帶なく行はれ家庭と申しましても、或は西洋造りもあり日本造りもあり半洋半和も御坐りますので、いづれか果して日本の家庭なるや判別するにも困難を感する位でありますして、これは誠に嘆びしき次第であると申す人々など終なるを表するものに御座りますて、則不思議にも日蓮大聖人の叫び出されたる教義と、正く一致するかの如く見ゆるのでありまするが、何に致せ絕對の意義を以て本尊とするものにあらざれば、到底世界的教法にもあらず、また世界的王法にもあらずと信じますので、この點に於ては、我國同胞の深く信じ、且解されければならぬ處であらふと考へます。以上くだしく述べましたる通り、私は御國體上に就て、如斯信じて居るので御座ります。終に臨みなを一言を加へ度きは、左の一事に御座ります。

私も既に申しました通り、生存競争は生類一般を通じ、盡未來根絶し得ざるべき狀態であります。世界の各國が一國となり、一靈位の下に融合するに至るべしとは、必竟廢人の夢かとも見へるのであります。天の如命に應するなどは、理想としては兎に角、到底實現し得べからざる空想であると云ひますのは、一般の思想でありまするが、これ皆我國の偉大なる天職あるを知らざるの致す處であると私は考へます。少くと

も我國に特有なる「御稜威」の意義を徹悟せざるの致す處であろうと考へます。

魚泳げとも水を見ず、誠に是非もなき次第であります。要するに御稜威は決して德力にあらず、權力にあらずまた富力にもあらず、是等の諸力を絶したる、一種崇高なる靈力があります。神力であります。此靈力は畏れながら我御皇統の御生命であらせらるゝ。優勝劣敗以外に超出せらるればこそ、斯靈力を遺憾なく御發揮遊ばされらるゝのであります。

言葉は少々過るかも知れませぬが、歴史上の明かに證明する處によれば、他の諸國の王統は、乍遺憾如斯靈力を保有せられたるものがない様に存じます。例へば徳川氏の下に諸侯ありしが如く、たゞ威力の最大なる一諸侯が他の諸侯をして、君主として己を仰がしめたるに過ぎぬのであります。

然らざれば、政治上の必要に迫られ一裝飾物と殆んど同一の意味合に於て、人爲的に推戴せられたのであります。さればこそ算奪も行はれ、興亡も伴なひます

ります。

是れを他の諸國の君民の關係に比すれば、果して如何で御座りましようか、要するに優勝劣敗の意義が、最上主裁者の上に行はれまする以上は、永遠に平和を維持すること能はざること、既に明白となりましたる以上は、たとへ一強國ありて一時は殆んど世界を征服し得たるが如き有様に相成りましても、獨我史上における徳川氏の統一の如く、また歐洲史上を一貫したる王家興亡の事蹟の如き、右様にしては到底天命に應すべき資格がありません。必ずや絶對崇高にして靈妙なる御稜威ありて、權力富力を絶したる意義を有せられ、兵力も壓すこと能はず、富力も動かすこと能はず、如何なる者の徳もまたこれを如何ともすること能はざる底の靈妙ありて、最上主裁者として君臨せらるゝにあらざれば、到底帝者の天職を盡して、世界の平和を維持することが出來ませぬ。而かも無上崇高なる御資格は、乍畏皇威に於て之を拜することを得るは、實に我等臣民の幸福であります。一時の虚榮に迷はさ

るので、甚しきに至ては奕棋を易るが如く、下民の爲に動され、悲慘の最期を來すのも少からざる有様であります。丁度賴朝以來の武臣が相代で政權を掌握致しましたる通りであります。然るに我國に於ては、富力・兵力を兼備したる鎌倉以來の武臣は勿論豊臣徳川の如きは、其の人爲的實力に於ては、畏れながら何事をもなし得たに相違ないのである。さらながら御稜威の凜然たること日月の如く、群雄は唯に一種靈妙なる神力に打たれ、君前に平伏するの外、何事をもなし得ぬのであります。

如何に實際の威力ありたればとて、彼の中山大納言の言の如く、必竟關東の代官たるに過ぎざるは、勿論であります。さればこそ實際の執權者は、年の進むに従ひ、徳化忽ちに衰へ、新陳交代して際限もないのでありますするが、御稜威の常に新たなる、我が「すべらき」は三千年一日の如く我帝國の元氣とし我等臣民にとりては、君にして父の如くまた師の如くに御出遊ばされ、何時も、最高主裁者として渝はらせられぬのであります。羅馬の強を夢み、一時の隆盛に惑されて古英雄豪傑の偉業を慕ふが如きは、薄弱なる意志を放棄し、崇高無上なる我御國體を、千萬歳に傳ふべき自強の策を講じて、金匱無缺ならしめ、人智自ら進み、機運自ら熟し、世界の人類が御稜威の何物たるを悟り、凡そ世界に於ける政體は其の君主獨裁たると立憲たると、其異なるとに論なく、悉皆優勝劣敗の意義を含むに着眼するると同時に、我帝國歴史の傳ふる如き、絶對的な君王を戴くにあらざれば、到底世界の大平和を維持すること能はざるの理を悟り、又之と同時に真正なる最高位は、御稜威の三字を指き、他に之を解釋するの道なきを明知するに至つたならば、天祖御垂統の御天威は自然の結果と致して完全に御遂行あらせらるべき、御機運に向はせらるゝに相違なかろうと思ひます。これ私が常に我國民の第一任務として、御國體の擁護を忘れてはならぬと信じます所以でありますするが、この御擁護の方法としては、たゞ左の如き我國特有の國民性を發揮し、唯忠主義則孝も義も信も禮も其他仁も慈

國民の我等の祖先は天皇の大御言宣あらせらるれば何人も涌然として「スマラ」が御摺であるとの觀念を起して直に死を以て大命を奉ずるの大精神が磅礴として天地を振動したる奈良朝以來の昔に劣らざるべきは我々臣民の第一に心掛べき處であると思ひます。物部の臣の壯士を大君のまけのまに／＼さくとふものぞ」これは我等臣民の拳々服膺すべき金言であると考へます。

以上申述べましたる處によれば、我御國體の無上尊嚴にして方偏すべからざるのみならず我等國民もまたする。

謹で我古代歴史を調べて見ますれば他の古代史と全然其の趣<sup>き</sup>を異<sup>い</sup>にする點がありますが精神的文明の發揮<sup>はつきり</sup>を認める點が則<sup>そん</sup>それであります、則我國の古代史には殆んど一々として慘たらしい事蹟<sup>じせき</sup>をとめて居らぬであります、また一も佛魔<sup>ぶつま</sup>相對<sup>あいだい</sup>の如き關係<sup>けんけい</sup>の存在<sup>ぞな在</sup>を認めぬのであります、如何なる場合でも決して甚く他人を惡むが如き様子<sup>ようじ</sup>が見へて居りませぬ、假令如何なる「マガツミ」でも皆悉くこれを穢れ<sup>ひびき</sup>と見まするのでこれを拭ひさへすればそれでもう許してやるのであります、「ミソギ」を以て種々の「罪トガ」を洗ひ去るのであ

これを擁護し奉るべき資格を有するが如く見るのであります  
が、我等國民がこの偉大なる性格を有するに至  
りましたる原因は實に皆天祖大御神の御俊德の致す處  
であらばするので、退て此點を拜想致し奉れば不知不  
識難有涙にくれざるを得ざる次第であります。則其原  
因と申すは色々の點より立派なる國民性を陶冶され  
たるに相違ないのであります。原因中の原因とも稱す  
べきはこう云ふ次第であらうと思ひます。

も眞も悌も皆悉く其の終局に於て忠道に合するにあらざれば、義とも孝とも云はぬと云ふが如き意氣を持つて、次の如き國民性を發揮するに外ならぬと相信じまするが、我國特有の國民性としては、第一に我國民は化學的國民にして、理學的に混合されたる國民にあらずとの一事を以てせんと欲するのであります。化學的及理學的の稱呼は穩かならざるの嫌ありまするが、私は説明を容易ならしめんが爲め、假りに如此區別するのであります。

則茲に理學的國民と稱するは國民が各其の個性を發揮しつゝ、相合し相共に一國となるの意義に御座りまして、銅は銅、鐵は鐵として其性能を發揮するであります。それからまた、化學的國民と稱しますのは、例へば、水の如きもので、水は酸水二素の化合物に御座りますが、元來酸素としては、一度燃しましたる木片の火をけして、其の餘燼を投すれば、直ちに再び燃焼せる性質であります。之を水に入れますれば、忽ちに消えますので、既に水となりたる以上は、毫も酸

素の特性を顯はしません、水素もこれと同じマツナで點火すれば、直に燃へる性質ではありまするが、既に酸素と化合して水となりたる以上は、全然反対なる性質を顯すのであります。されば酸水二素は水としての其全能を發揮するにもせよ各自の箇性に至ては毫も是を顯はす事がないのであります。我日本國民は、この化學的國民に屬するもので、此一事は明に我國民の偉大なるを證するものと、吾輩は信じますので、誠忠の意義なども、此の如き國民にあらざれば、中々にかみしめるることは出來まいと思ひまするが、この國民性を維持しつゝ御國體を擁護致しましたならば、我等日本國民の祖先が我々に残し置かれた天職は、必ずこれを全うし得ると考るのであります。併し何故に我日本國民のみが、化學的國民であるかと申しますれば、これは酸素一分と水素二分と混合しても、水にはなりませず、必ず一の化學的作用を起すべき靈力を加へなければならぬのでありまするが、我國民は我御皇統の御稟威の作用によりて、初めて化學的國民となつたので、一度御

ります、これ等の寛容なる性格が自ら國民に教へこま  
れ敵と雖も恥まず悔らず皆相等の敬意を以てこれに對  
しました相當の愛情を以て之を撫育するのであります、  
これ等の關係は到底他の國民には見られ得ざる性格で  
あらうと思ひます、歐洲の古代史は無學なる私の調  
査したるのみにては斷言は出来ませぬが精神的文明の  
程度我に加かざるもの如くどうしても敵に對して寛  
容なると能はずして皆悉く慘酷なる取扱をして居る  
のであります、我隣邦の支那の如きは特に甚しきが如  
く私の目に映するのであります、先第一に他國の  
人を敬する心持がない、自分の國の外の者は皆悉く  
禽獸に譬へて名を命して居ります、しかし其言ひ顯  
はし方が下品で劣等であります、それのみならず其  
思想は悉く皆利害主義でありますので如何なる高士  
と雖國士と雖ども皆悉くパンの問題より生じたる思想  
に捕捉せられざるはなき有様であります、彼の立派な  
經書などにもこの分子が大分見へる様であります、  
聖人之大寶を位と曰ふは何を以て位を守る、曰く人な

り何を以て人を聚む曰く財なりなどもその一例と見る  
べきものであるうと思ひますので、兎に角問題は  
財賤則現實の利益にありまして人生觀の多分はこの利  
益問題に捕捉せられてどうも立派なる精神上の觀念が  
ないかの如く見るので、或はそちらの關係から今日  
の支那人の性格を養ひ來たかと思はれるのであります  
が、我古代史に於きましては支那とは全然反對の様  
に見えます。

先第一に王化に霧はぬ化外の民を稱するに有螢光神  
及蠅聲邪神（日本書記）とか或はまた畫波如五月蠅水沸  
支夜波如火螢光神在利出雲國造神賀詞など云て居ります、また少し降りましても日本武尊の東征の段に至  
りましても近江暗吹山有荒神などと云てありますので支  
那の歴史にある大戎とか貉狹とか差とか云のと大分違  
て居ります、それから又敵を處分する場合に於きまし  
ても罪とがを後悔すれば悉くゆるされて其の後は神と  
して敬ざるゝので、武靈侯神に克平せられたる建御名

方神の如きも立派なる神として讃詠明神の名を今日ま  
でも傳へられて居るのであります、其の他これに類す  
る事蹟は古代史に多く見へまするのみならず夫婦の關係に於きましても誠に立派なるものに御坐りまして殊  
に婦徳の如きは今まで美しき教として傳ふべき者があ  
ります、「あはもよめにしわればなをきてをはなし  
なをきてつまはなし」などは愛情もあり貞操の意義も  
嚴立して居りまするのですが、要するに我神代に於  
に於きましても精神的文明の柱役いせきを中を進んで居り  
ましたので決して今日想像する如きものでなかつた  
のでありまするが、これ皆其統治者たる天照皇大  
御神の御高徳の然らしむる處教化の偉大なる御事  
績は古代史を読みますると同時に感激に堪へざる如く  
思はれまするのであります、則古代史を一貫したる精  
神とも申すべきは敬愛の二字に御座りまするのでこの  
二字の向上したる結果は立派なる國民性となつたもの  
と私は信じます、近き日清戰争に於ても日露戰争に  
於きましても敵敵愛敵の意義が遺憾なく行はれ西洋諸

國の戰史には到底見られざる如き美談を聞くのは必竟  
我國民は生來慘酷の性質を有せぬので、この精神は文  
明の眞髓に相違ないので必竟神代より養ひ來りたるものと私は信じます、日露戰爭に於て捕虜を好遇した  
韓の捕虜などもまた同一の好遇を受けつまりは我國に  
歸化して立派なる大御賓となつたのであります、日露  
戰爭中私の實見したる一つの美談がありますがこの談  
なども遺憾なく我國民の精神的文明を證するものと思  
ひます、三十七年八月十四日の戰ひに露艦「ルーリック」の捕虜六百餘名に及んだのであります、其内の半  
數以上は負傷兵で非常に慘酷な重傷兵も澤山あつたのであります、戰終て後私が自分で負傷兵の治療所に  
行て見ましたら大勢の兵員がそこにはいつて居ります  
から、これは或は露國の兵員に對しヒドイとでも致  
はせぬかと思ふて非常に心配したのであります、何に  
致せ怨みに怨を重ねた上敵兵でありますからどんなこ

とをするかも知れんと思ふて人を推分てはいつて見ましら、そこには日本の負傷兵も居りますが殆んど全部が露西亞の重傷兵であつたのであります。それをおもなでとり奉て團扇や扇を以て煽で呉れて居るのであります。御前方はよいことをして呉れる誠に感心だといひましたら、そこに居るものがこの奴等は惡ひ奴でありましたがこうなつては可哀想ですと云ふて居るのであります。此佛の如き心根は文明の極致を遺憾なく顯はしたもので、私はこの一事を以ても我日本國民はもう文明の極點と僅か一枚の紙をはなれて居るばかりであると云ふ様な感じが致しました。此一種の尊むべき精神は實に我歴史の賜物で御座りまするので、もしも我邦が他の諸國の如く二百年三百年に一回と云ふ具合に他國の侵略を蒙る蒙古襲來の如き慘酷なる経験を致しましたならば、如何に優雅なる國風にても到底これを維持すること能はざりしは勿論なりと思ひます

るのでありますので、これあればこそ化學的國民となるべき性質をも備るに至つたのでありますので、この二字こそは我御國體の擁護上國民性の向上上實に最も大切な文字と私は考へます。然るにこの頃になりますては如何なる故か國民に大變化を生じつゝあるが如く見へますので、一寸新聞などを見ましても以前には聽くことも出來ざる如き慘酷な話が澤山ありますので、或は外國との交通がこの害毒を傳染致しましたのであるまいとも考へるのであります。私の觀察達かは知りませぬかどうも他の諸國の人とは其の歴史上不得已結果とは申ながらどう致しても慘酷な性質を持つ居りはせぬかと思ひます。それからまた一つ心配に考へますのは敵の一宇であります。私の觀察達かは知りませぬかどうも他の諸國の人とは其の歴史上不得已結果とは申ながらどう致しても慘酷な性質を持つ居りはせぬかと思ひます。それからまた一つ心配に考へますのは敵の一宇であります。今日の我等國民の通弊は主人に對し師匠に對しました兩親に對し餘りに遡過ぎて敵意に關する觀念が或は萎縮致しませんかと云ふ點に御座ります。例ひ國民性として今申上ました通り化學的國民の性格を具備した大犠牲主義を遺憾なく實行致しましても敵の一宇を缺きまし

が、何に致せ天祖御在世の折より既に高貴なる文明の理想を養はれましたので如何に御感化の偉大なりしや如何に御高徳にあらせられたかと云ふことが今日より**拜想し得る**のであります。

天祖天照大御神の御靈德の如何に大切なやはこれにても分るのであります。この御靈德と御建國の御精神とが誠によく調和致しましたので金匱無缺なる御靈體が成り立ましたのであると信じます。如何に御建國の御宣言が御立派にあらせられましても御靈德と伴はせられざる場合に於きましたは、例へば秦の始皇の如き滑稽なる歴史となつたであらうと思ひます。朕を始皇帝とし二世三世より傳へて萬世に至らんと放言せられても二代も繼ぎ兼ると云ふ様なこともあるのであります。

そこで前にも申上ました通り敵愛の二字は我國民性の大體とも稱すべきものに御座りますので、この二字あればこそ忠孝二字の精華も出來ましたのでこの二字あればこそ世界の文化を融合すべき資格をも生ずたならばこの國民性もまた自ら滅退するに至りはせぬかと思ふのであります。もし萬一敵と云ふ意味が滅しますれば禮儀もなくなり、また從て何事につけても真率を缺くことになり沐浴齊戒して神前に伏し鞠躬如として論議すべき政治向のことまでも轉じて醜魔の草窟に於ける杯盤狼籍の間に於てすると云ふことになるのでつまりは公け上の相談もあら云ふ場所でなければ出来ぬと云ふ習慣になりつゝありはせぬか我等臣民嗜好も意匠に御勅題の寒月照梅花を用るが如き不謹慎な心得がいをするに至つたのであります。これなどは充分に注意して行かなければならぬことと思ひますが前にも申上ました通り我帝國の思潮の變遷は神明の御擁護により極めて短くまた低き波動を以て進みますので、國家の亡滅常にこの波動の大なるより生ずること明白なる以上は、先に樂天的思想を以て後來の趨勢を觀察し、時に應じ物に觸れ常に基壽の無強なるを經りつゝ快活に我々の職分を盡すのが我々臣民の御國體

に對し奉り寸時も忘る可らざる心掛であると思ひます  
るが右に述べたる一點に就ては御國體の擁護上是非と  
も注意すべき必要あると私は考へます。

以上述ましたるは先日も一寸申上ました通りに此度  
新に構成致しました材料によりましたのではあります  
んで私の認めました帝國々防史論の抜萃に過ぎぬの  
でありますから、同史論を御覽になりました先輩の方々には誠につまらぬものであつたろうと考へますが  
別に斯に新き例を引きましても新き理論を加へまして  
も全體に於ては何等の改良をも見出さぬであらうと考  
へましたので僅か二三點の外大底舊材料のまゝに申上  
たので御座りますので此點は偏に御許を願ひます、  
余り興なき御話を長たらしく申上て恐縮に御座ります  
するが何に致せこの問題は至極の敬意を拂ひ真率に校  
究すべきものと考へますので、どうぞ先輩の方々は  
御遠慮なく御叱り下されて私の考の間違ひましたる點  
を御指摘相成らんことを冀望致します。

## 報道

### ○ 東京天晴會

五月の例會は十三日午後四時より九段傍行社  
に開かれた定期より陸軍少將石橋海軍少  
將矢野大審院檢事と先頭として各方面に於け  
る知名の諸氏は陸標詰めかけられて卓を囲み  
茶を啜りながら現代思想と宗教との交渉や信  
仰の方と國體の靈感などに就いて研議せる  
意見を披瀝し何れも有益なる大議論であつた  
午後四時園田幹事に依りて開會は宣せられ本  
多日生師は前回の標講たる將來の宗教と日蓮  
主義の議題を提げ壇上に立つた凡そ宗教は  
國人の教説に盡し平等の慈愛がなくてはなら  
ぬ其當面の目的を國家の興立に置き我御國  
體を教そのもの、根本意義よりして擁護し上  
つるもの即ち日蓮主義の特色であると說き  
起して第三要素の我國民性を發揮し第四の智  
識兼備して國家の進歩を翼賛するもの第五の  
世界の各宗教に比較して優に卓越する宗教な  
らざる可らざる所以に就て理義論旨共に周密  
にして明確を極め將來に於ける我國家の進歩  
を助け國體擁護の大德教は日蓮主義なりとの  
結論を與へて大に日蓮主義の眞實を發揮せら  
れた丁度講演の中には頃新入會者外務省政務局  
長倉知鐵吉君は見えられた暫時休憩の後美術  
學校教授竹内久一君は加藤清正の信仰に就て  
と題して清正の不撓の勇氣は法華身讀の現は  
れなりしむ設き彼の三韓征討凱旋の際特に誇

故高山博士云く

吾人はクロムエルを以て真正なる愛國者なりとする  
と同一の意味に於て日蓮を真正の愛國者なりと認む。

是の如き意味に於ての愛國心は和氣清磨楠正成乃至  
北條時宗等の夢にだも會得し能はざりし所。恐らくは、  
二千五百年の歴史に於て日蓮獨り是を會得したりしな  
らむ。吾人が清磨正成時宗等を指して特に日蓮に歸依  
するものは畢竟之が爲のみ

是の如き愛國心の要求する所は唯是の國土の究竟の榮  
光のみ乃至日蓮は二千五百年の日本歴史中に於て是の  
如き愛國心を有したる殆ど唯一の偉人也。

丙丁童子の國家主義は乞ふ去つて道學先生と共に是を  
談せよ。吾人の日蓮は則ち與らす（穆牛全集四卷）

百枚を製作して紀念としたが其跡には甫無事

には法華經と刻してある亦征の時着用した鏡  
字の形であると云ふ所以を墨板に圖して詳し  
く説明せられた殊に實物によりて證明するた

めに見ることの難い参考資料を供せられたの  
で茲する所甚だ多かつた午後七時になつたの  
で食堂は開かれて晚餐の卓に就いた會員何れ  
も和氣蔼々として歡談笑語を交へナシとお

ークのカフーは中々賑やかである例によ  
り松本幹事は新入會者を紹介するので會員は  
拍手を以て迎へる海軍少將宮岡直記者外務省  
政治局長倉知鐵吉君郵船會社員木村十郎君日  
宗新聞記者清水勝一君の四名であつた晚餐が

終つたのは午後八時で其れより小林文學士は  
日蓮主義と樂天主義と云へる前回の標講を演  
べられた酒瓶雄鷹なる快婿はいつもながら聽  
衆を酔はしむるほどであつて加ふるに該博の  
引證と適切なる史的事實を捉へ來りて縱横に  
論じ去り論じ来る妙處是或は日蓮主義者なる  
の故か其講題最後の斷案に於て現實と理想と  
を融合し譲りしたる現實に在りての樂天主義  
ならざる可らずとは眞に日蓮主義の特長を發揮  
したものと云ふべきである講演の終りた  
は午後の十時で直ぐ散會は告げられた參會者  
六十餘名みな法悦に仕して歸途に就かれて

天晴會は生れて既に三歳の月日を送りたが女  
子は未だ日蓮主義研鑽の機会を有しない凡そ  
世の中に起れる問題が單に男子の力のみに依

りて解決し應付し而して之を堅持し發展し得  
るならば男子のみの修養と活動にて事足れり  
あるが苟も一切の事必ず女子の力に俟つも  
が修養の機關を設くるの必要がある

ことに現代の思想界は優しさ女性によりて  
卓越せる日蓮主義を研鑽し依て之を家庭  
に子弟教育に應用すべきを促がしつゝあるの  
であるさればこのたび本多日生師小笠原丁君  
の發起のもとに始崎文學博士の筆になれる設  
立趣意書を公にすることになつた

天晴れぬれば地自ら明かに、世法の運用は  
佛法の根本を得て始めて完きを得べし、  
人の心に迷ひ多く、世渡りの薄に波風驚き  
今世に、婦人の思慮深くらず信仰弱くは、  
やがて是れ世道の廢興を助長するこゝも  
なりなん、並に大聖日蓮の發揮し賜へる佛  
教は、末法の大光明として、人々を三身

即一の本覺に歸らしむると共に、世間道義  
の大本を顯し、特に女人成敗の授記により  
て、婦人をして佛法世法開ながら完き生活  
を踐ましむる宏範を示し耀ぶ此度我等が上  
人の御教に基きて、この地明會を組織した  
る精神は、一に婦人方のこの道を突めその  
教を諦かんことを望むにあり、謙みて古賢  
先聖の靈験を仰ぎ奉り、吾同志を同うする

方々の入會を希ふ

十四日衆議院議場内議員集會所を會場に充て、  
發會の式を擧げた當日に風と雨とで來會者如  
何がいと氣遣いつたが熱心なる會員は雨を冒  
いして定刻前に詰めかけられた人員は三十三

會には主任本多誦聞西地方に巡教せられて法雨に渾ふを得ざりしが聞法の熱いよ／＼高まりて微妙音聲の廣長舌を聞いて定刻前より參集するもの八十餘名を算し本多大僧正の大導師にて莊嚴なる法式のもとに現當二世の新金回向を爲し午後一時半より野口僧正は花と修養と云ふ華やかな講題にて櫻の花のやうにばつと咲いて夜風に散るよりも嚴冬の苦節を認んで陽春二月匂ひも床しき梅の花となりて其實を結ぶが如くまた蓮華の花とりて其信仰を堅實にせざる可らずとて例の簡潔なる句調のうちに多様の意義を含まして述べられた本多大僧正は信仰要義を述べて更に過去及現代に於て尙未だ日蓮上人の主義を誤るもの多くの信仰對象の確立せざるもの或は又種族の僻語に没頭して佛陀を蔑みし聖道を偏崇するが如き是皆論するに足らす佛陀と吾人との關係者人と妙法との關係に就て詳細にし

◎妙教釋人會

「女人」となる事に物に附けて居た日本莫大の眞理として、島方以て會の發展を語るべく書つたそにて、會員の數會したのは午後五時であつた別室では、崎博士、小林文學士、本多大雷、佐本耀司、士野日僧正、小笠原子爵、弟關田雷都、井村雷都、三上本園記者の諸氏は、晚餐會を開いた車上博士、小林文學士の現代危機の狀態を指摘し、皮肉なる論評と適切なる批判を與へられ、有益なる所談であつた會場を出た時は、午後の八時で雨はさかんに降りて居た。

名である式場正面には御聖像を安置して紫綬  
緑の幕を張り法華經と御遺文跡を備へ其右側面  
に講演壇は設けられてある午後一時三十分小  
笠原丁君開會を宣し小林文學士座長として那  
意書及會規に就て滿場に語りたるもの異議なく  
之を決し本多大僧正は剛毅なる聲にて聖訓を  
奉讀せられ一同は手を合はして南無妙法蓮華經  
経と唱へ日蓮主義研鑽の心狀を告白した次に  
子爵小笠原夫人は御聖像を拜し壇上に進み沙汰  
着庄重なる態度によりて祝詞を頌讀せられた

四  
引  
味  
々

懐きて却に發會の式を舉く  
我等は驚きに當代知名士に依りて天晴會の  
組織せらるゝとして發達しつゝあるのを  
最も見開し隨喜に堪えず心痛かに大聖人を  
敬慕する女子の爲にもこの種の會合を催す  
し内には精神の修養を賣け外には志を同じ  
する女子に對し信仰勧發の友となり我大聖  
教を開きて苦の衆生を度脱せんとの誓ひを  
果さばと惟ひき而るに今や時至り機知も  
地明會を組織するに至る誠に優曇華の咲き  
生首の眼開きて父母を見るの思ひあり今  
リ我等は共に奮闘努力して天晴會と相並ぶ  
心靈界の光明となりて以て一は蒼空一碧天  
の晴れたるが如く一は大道坦々地の明かなる  
が如く知見は光明の如く慈音は蓮華の如  
くならんことを期す  
「女人となる事は物に附つて物を隨へる身な

との聖訓は蓋し女子修養の方針を示させ  
ふものゝ茲に謹みて發會の式典を成す  
明治四十四年五月十四日  
會員代表

子雷夫

子爵夫人小笠原秀子

◎德教育年會 五月十五日と六月一日の午後六時より淺草南松山町の法成寺に於て講演を開いた主任關田講師は實業青年の精神修養と社會生活に缺くべからざる倫理上の問題を解き或は生存競争場裡に活動すべき不撓の勇氣を教へ時に日蓮主義を説いて精神的歸向を知らしむ會員の多くは講演の大要を理解するを得るに至り興味を覺えるものがあるので競ふて來會し、いつもながら盛會である。

◎國明會 第三例會を十五日午後一時より淺草吉野町常福寺に聞く來會の聽衆は尠ないが支那先きに立ちて聴いて居た人は多かつた三上氏が日蓮主義の研究に從ふは相互の名譽なりとて上人の人格の一画を紹介し關田僧都は信仰の必要と其宗教の發揮の大要なる所以を致きて日蓮主義の信仰を勧め多大の感動を與へて降壇し辯護士松本氏は日蓮主義の勃興は時代の必然要求より来るのを如何にしても今の者は日蓮の如き大人格を學ばなくては人らしき生涯を送られぬ考へ来れば日蓮の六十一年の生涯の活動は悉く我等の教訓として之を實行し脉讀し最後向上の目的を達すべきなりとて酒々一時間餘に亘つたが聽衆は大いに入り敬意と感謝とを拂つて散會したのが午後五時過ぎであつた

◎樹治會 この會は毎年五月帝大と一高との日蓮主義青年が相會して組織せられたので會員の數は多くないが何れも熱心に研鑽の功を積んで居る毎月の例會には本多大衛正の開目

との聖訓に蓋し女子修養の方軸を不させ  
ふものか茲に謹みて發會の式典を成す  
明治四十四年五月十四日

◎報国会 有志の組織した日蓮主義の會で、二月十日午後六時より日本橋坂本公園の旗亭に講演を開いた關田信都は日蓮主義の卓越せる、とを縱横無盡に説き示し本多大僧正は日蓮主義の貴いのは個人の精神教説は勿論だが一切の事皆正法と關係あるの理義を不して實業にのみ狂奔して策の問題を知らざるものに警覺を加へ午後十時散會したりき

◎東洋大學橋香會 試一會堂を會場として毎月一回本多大僧正より遺文の講義を聽くことになって居る既に本卦鉢は終りて二十一日立正安國論を講し六月四日撰時鉢にうつりた同鉢は重要な遺文である教法宣傳の上に時と序との大事を擧げて教義國を統べ法然の如く舉に機と法のみに着眼して宗教の本質効用を没却せるに反し上人は完全に圓滿に五綱の判を示したまふたが之が本多大僧正に依りて解釋せらるゝので亦さうに難有覺ゆるの感がある

◎親善會 浅草吉野町圓覺寺鈴木日雄師は法華經の親近善友の文大學生の親民有止善翁の句を取りて本會を設立し一面には精神を修養せしめ一面には宗教信仰啓發の機關となし今五月二十五日發會式を擧げたが鈴木師の熱心なる勧誘と廣告とは其効を奏し七十餘名の聽衆はみな襟を正ふして寶前に陣取りて居る午後二時鈴木本師開會を宣し三上本誌記者者は人は生存上物質を欲求するは無理ならざることなるも精神の上には活ける信仰がなくては安心しも元氣よく事業へ出來ないから最良の日蓮主

することになつて信仰の度を進むるに至らば  
眞の進歩であると結ばれたが會員は何れも深  
く感に入るもの多きを見たが最後に姉崎文  
學博士は拙手に迎られて壇上に現はれ今の時  
代は日蓮王義法華經の教が特に大切になつて  
来る相應の時機であると説き起して女子と佛  
教との關係に就て歴史的事實を捉へ來りて繪  
明し聖德太子の厚く三寶を敬ぶべしと云ふ法華  
經主義は當年深く國民の思想に印象せられ  
天然の美と相合してそこに和樂の中心を築き  
人としての美徳を完備するに至らしめた現代  
の婦人は不幸を哀むだけに涙を灑ぐは無駄か  
あつて無意味である日蓮上人の「泣かねども  
涙乾くひまなし」と云ふ根本の信仰は天地と  
共に和樂の基へとなつた涙でなければ婦人の  
氣風を高め社會上の地位を高むることが出來  
ないそれ故に多くの讀物のうちでも法華經をな  
る唯一の讀物とするならば其處に必然に天地の  
美と合し精神の達は築き上げられて希望と愉  
快に充ちた所の和樂の生活を遂げ得るであら  
う上人の所謂「甘露の涙」茲にいたりて始まり  
て婦人先天の特性も發揮し得るべきである  
と滔々一時間に亘りて演へられた會員は車をな  
らこみて毒しを味ひ茶を啜りつゝある間に交  
名披露と役員の報告があつた

一縣下聖祖門下一同至誠爲力して必ず千葉町に於て大講演會を開く事  
佛祖贊覽  
明治四十四年五月十日

縣下聖祖門下一同  
龍谷長親下は宗徒に對して熱誠をこめたる訓示を爲し松本吉田聖成諸氏の祝辭刷讀があつて野口僧正の發聲にて萬歳を三唱し酒井座長閉會を宣して式は終りを告げた

祝辭

天晴舎は千葉縣聖祖門下宗徒大會の開會を祝し此の大會よりして内は門下各派合同統一して異體同心の聖訓に遵ひ外は立正安國の日蓮主義を宣揚し佛法は玉法に冥し佛法は玉法に合し一天四海皆歸妙法の理想を實現せしめられんことを期待し茲に將來の健全なる發展を祈る

今昔の感想 大僧正 各講師とも熱烈なる信仰より突發する大廣舌であつて深く／＼懸奮の體力を與ふるものがあつた松本君は意氣天を衝く底の辯論をして現代の弊風を痛撃して日蓮の大人格を紹介しさらずに餘す所なしである小林文學士の輕妙流暢なる講演は時に奇句珍談を交へ平易明白の間に宗教の本質を說き社會の缺陷状態を論じ其關係と教説の根本政策を断定し日蓮主義と社會發展の交渉を極論して降壇するや多大修正は共進會の目的が地方久慈風教刷新會に存することは我邦には嚆矢にして即ち單純なる物質經濟の問題に止まらず精神的方面に進み來りし事實は最も注意を拂ふべきことであつて更に此際公會堂を精神修養の會合に供せられたる當局者の洪量と措置は眞に感謝を表すると共に是亦前代未有の事實なりとて現代が如何に精神問題の忽諸に附すべからざるを覺れる證明なりとの前提を認きて國連

の下に集まるものは悉く統一の信仰と透明なる職見とを有すべきであるが如何なる動機によるものか門下の各教團は互に其意見を異にし從て執筆強しくしてさるに纏合の實理を爲し其實行を期す  
一縣下聖羅門下一同至誠爲力して必ず千葉町に於て大講演會を開く事  
佛羅照覽  
明治四十四年五月十日  
縣下聖羅門下一同

◎千葉縣の大舉傳道

(四)第一義會　六月の例會は四日午後一時より本會に開く例によりて會員は勿論新聞の日曜講演の通信など一々注意を拂つた本多大僧正導師のもとに法要が済むと爾田雪都の本佛論の講演があつた述佛と本佛との名分を明かにして本傍の慈悲と活動と功用とを詳細に講説された本多大僧正は世界最善の宗教と云ふ講題に依りて大梵音を振るはれ世界の各宗教日本のが佛教日本の諸學說を捉へて適切なる評論を試み法華經は宇宙觀に於ても人身觀に於ても超人觀に於ても哲學的基礎の上に宗教學の要旨を完備し最善の宗教は法華經なり日蓮主義なり全人類はこの最善の教に依て無限の向上を爲さざる可らずと結論し聖訓を奉讀して降壇せらる會員には例の如く茶菓を供し計會したのは午後五時であつた

（おもに在りたる今や小栗組共進會を機として宗徒大會の浮榮を行はせらる譲れ、法と國との爲め慶賀せざるものあらん。希はく将来健全なる道程を活躍して大願を成就せられんことを）

東京日蓮主義信徒總代 吉田珍蝶

午後一時三十分大講演は開かれた。

現代と日蓮主義 松本郡太郎君

宗教と社會 小林文學士

健全なる宗教と日蓮主義 本多大僧正

今昔の感 旭大僧正

各講師とも熱烈なる信仰より突發する大廣舌であつて深く／＼懸奮の體力を與ふるものがあつた松本君は意氣天を衝く底の辯論を以て現代の弊風を痛撃して日蓮の大人格を紹介しさらに餘す所なしである小林文學士の輕快流暢なる講演は時に奇句珍談を交へて平易易解明の間に宗教の本質を說き社會の陥落状態を論じ其關係と教説の根本政策を斷定し日蓮主義と社會發展の交渉を極論して降壇する。日本多大僧正は共進會の目的が地方文具風教刷新に存することは我邦には嚆矢にして即ち單純なる物質經濟の問題に止まらず精神的方面に進み來りし事實は最も注意を拂ふべきことであつて更に此際公會堂を精神修養の會合に供せられたる當局者の洪量と措置は眞に感謝を表すると共に是亦前代未嘗有の事實なりとて現代が如何に精神問題の急務に附すべからざるを覺れる證明なりとの前提を認きて國運

○第一義會　六月の例會は四日午後一時より本會に聞く例によりて會員は勿論新聞の日暮謙流の通信など一々注意を拂つた本多大僧正と禪田僧都の本佛論導師のもとに法要が済むと禪田僧都の本佛論の講演があつた達佛と本佛との名分を明かに説いて本佛の慈悲と活動と力用とを詳細に説明されられた本多大僧正は世界最善の宗教と云ふ論題に依りて大梵音を振るはれ世界の各宗教日本のが佛教日本の諸學說を捉へて適切なる評論を試み法華經は宇宙觀に於ても人身觀に於ても超人觀に於ても哲學的基礎の上に宗教學の要素を完備し最善の宗教は法華經なり日蓮主義なり全人類はこの最善の教に依て無限の向上を爲さざる可らずと結論し聖訓を奉讀して降壇せらる會員には例の如く茶菓を供し終會したのは午後五時であつた

我懸下に於ける聖祖門下一同  
謹んで異體同心の禮訓を奉じ

現な期せんか爲に爰に共連合の開會を被りて宗徒の大會を行ふ  
司會者宇都宮室蓮師は座長の選舉を語りしも司會者に一任すとのことに酒井眞間山賀主座長席に着いた左の決議案を朗讀して滿場に語りたが異議なく喝采を以て可決せられた座長は左の決議文を朗讀した

義を率すべしとて既な結び本多大僧正は特に  
簡明平易なる句調と優しさき音聲にて人は必  
ず信仰のあるべき所以と傳陀の慈悲救濟の力  
の偉大なるを教へ一々慈家の肺腑の秘奥を  
開き靈妙の感にうたれて不識不知題目を唱ふ  
るものとありたりき以ていかに法益の甚大  
なりしかば知るべきである身は將來健全なる  
發達を望む

◎第一義會 六月の例會は四日午後一時より  
本會に聞く例によりて會員は勿論新聞の日曜  
講演の通信など一々注意を拂つた本多大僧正  
導師のもとに法要が済むと朝田僧都の本傳論  
の講演があつた達佛と本傳との名分を明かに  
して本傳の慈悲と活動と方用とを詳細に説明  
せられた本多大僧正は世界最善の宗教と云ふ  
論題に依りて大梵音を振られ世界の各宗教日  
本の各佛教日本の諸學說を捉へ適切なる評  
論を試み法華經は宇宙觀に於ても人身觀に於  
ても超人觀に於ても哲學的基礎の上に宗教學  
の要素を完備し最善の宗教は法華經なり日蓮  
主義なり全人類はこの最善の教に依て無限の  
向上を爲さざる可らずと結論し聖訓を奉讀し  
て降壇せらる會員には例の如く茶菓を供し散  
會したのは午後五時であった

◎千葉縣の大舉傳道

の興亡は國民道德界の如何に存するの意義を  
さき各宗教の根本主義を評議し去りて日蓮主  
義の特長を懇說し宗徒の奮起を促おして結論  
する。旭大僧正は年老へて居るが衝天の生  
氣は眉宇の間に溢れぬに壯者を凌ぐの態度  
がある。千葉郡は靈地である世界の人は知らぬ  
ものはない。即ち日蓮上人は六百年後いま尚ほ  
没滅として活きて居るからである。他宗の祖師  
は相手にならぬ他宗の盛んに見ゆるのは羅刹  
の人格の大なる説からでない。他に原因がある  
日蓮門下は上人の主義が高く人格が大なる故  
に益々隆々として光りを放つ所以である。茲に  
講演は終りて司會者は閉會を告げ散會したの  
が午後四時三十分であつた。それより講師及來  
賓は應酬の板倉法律事務所に休憩して午後  
七時千葉駅の汽車にて鎌京せられた。  
それから十日の夜の道路布政は人員少なくな  
つたので千葉神社内に集中し眞宗と眞言の演  
つて居る前に立つて所謂狂熱的に活動したの  
で聽衆の大部分は我講論の下に集まりた。一面  
は極めて慎重な態度で盛んに小笠原子爵著の  
「靈格日蓮の愛國心」と「日蓮上人」と云ふ冊子  
を頒布するので皆何れも「雖有富御座」云々  
と禮を云つて大事に懔るへ入れて行く効果は  
観面である。在來宗教家が小冊子の謡本を頃つ  
たとて「なんだか」の挨拶であつたのが禮を云  
ふて懔ろへ入れるといふ事實は大に注目を要  
することと思ふ。千葉神社山門側で三上本社員  
が日蓮主義を研究しないものは自己の意義の  
解らん阿呆なひとだと叫んで居るとき島田日  
宗記者や山岡権蔵正成鳥魯都森川審都吉田存

義師までが施本を配付して居た眞に全く協力一致の行と云ふべきだ提燈の火が消えるので引き擧げたが事務所へ歸つたのは十一時の鳴鶴覺を與へ三身即一の本覺に歸らしめねばならぬ「若黨共二陳三陣打つてけよかし」の聖訓を體識して如說の修行に努めやうと互に一片護法の赤誠より肝膽相照して最も強進にして最も熱心に満つた十四日は大舉布教の最終日である此日千葉縣警監察官並市大法會は午前十一時猪の鼻臺に行はれた石碑は猪の鼻臺の東北風景絕佳の地をトして花崗石を以て建設せられたので縣下には他に之に比すべきものはない式場には天幕を張り寶塔を造立し晉華證明な供へ其莊嚴雄偉なく整備し道族來賓を拜者答の席定まりて準備全成るや午前十時號鐘の響きと共に日宗の大導師山田日偉師は主題旗幟を沛雨に翻へしつ二十四名の僧伽を率ひ顯本宗の大導師山田日蓮師また前例と同じく僧伽天童に開示せられ佛陀諸尊現の寶土に着けば嘲笑たる音聲は清く爽々に猪の鼻の松聲に和す式場は天人常充滿の寂光土といまこゝに現はれたがのやうである讀經が終りて音樂吹奏のうちに可愛なる天童の供式行はれ次て大法會代表として日宗の木村壽延師の弔文顯本の中村乾信師は追憶の辭を朗誦し道族及慈善寮部代表萬田謹長の焼香があつて最肅な追悼式はどの障りもなく佛帝の加護によりて成滿を告げた

本山發員近来寺院住職及西村治兵衛、西村吉右衛門氏を始め、信徒継代源野、吉川、秋山氏を始め西村店員諸氏其委員として萬端の準備をなし來會加入者八百餘名の好成績にして本山前途の爲め祝すべき事也

## 大阪天晴會

第十一例會 五月十五日午後七時大阪ホテル  
開鑑會衆十二名晚餐後左の講話あり  
法華經の大意 池田爲三郎氏  
上人の主義（理想的方面）梶木日種氏  
右の外新會員山田秀太郎氏の感想演説あり又書家當本長洲氏が自我偶の文を揮毫せる扇面を會衆に頒ら其他前月紀念大會に就て各自の感想談あり午後十時閉會

## 日蓮讚仰義會

神戸高等商業學校學生中には昨年來日蓮主義の研究會を開いたが今回同學生吉

川松五郎久々江清三郎小山卓三等の有志者发起となり櫻題の如き講義を組織し五月三十日を以て初會を同校學生會館に開催す午後三時開會先づ發起者挨拶あり夫より左の講演に移る

日蓮上人の三大誓願に就て 上田智量師

右終て直ちに茶話會を開き質問又は談話等盛る

當日來賓の主なるものは警察部長同課長各署長其他監獄吏新聞記者町村吏員等にしていざる因縁なるか雨とに苦められしも幹部員の指導宣しきを得たるも良の其責任を負ふて機敏なる處理ありしため少しも遺憾ない

りしは幸ひであつた終りに臨んで特筆すべきは七日間の大舉傳道が能く一貫し繼續して兩教團が努力した事實は門下の歴史に尋を添へるものと云はねばならぬこの度の精神ないま一歩進めたならば近き将来に於て精神的合同はそれほどに難事でもなるまいと思ふ

## 豊橋教報

豊橋市は東海道権要の域にして大に佛教上の望みと餘地を存す而かも市には日蓮主義の寺院僅に妙圓寺のみされば布教部面に於て大業蹟を試みば日蓮主義信者は隣然として之に集まるべき也このたび文學士國友日斌師は岡山中學の教諭を捨て、豐橋の妙圓寺に入りて教界の戰士となれり師の瀬透明敏にして音楽吹奏のうちに可愛なる天童の供式行はれ次て大法會代表として日宗の木村壽延師の弔文顯本の中村乾信師は追憶の辭を朗誦し道族及慈善寮部代表萬田謹長の焼香があつて最肅な追悼式はどの障りもなく佛帝の加護によりて成滿を告げた

に五時開會す同會は毎月一二回開催の規定にて大阪より梶木師出演の筈なりといふ

## 備前和氣の教況（吉宗）

本成寺住職原田容廣師は近來地方に於ける諸種の講演依頼に應じ精神修養又は日蓮主義を布演されつゝあり故に其の結果として見ゆべきは當町會員に於て拾參軒同時に改宗入檀するに至れり因に其の舊宗所屬及び性名は左の如し  
神道宇高石太 神道宇高文七郎  
無闇阿部春助 單稱上村藤八郎  
天臺宇高音吉 神道藤原芳松  
天臺岩崎泰市 天台稻山繁次  
無闇宇高百二 天台能勢八三郎  
無闇谷矢幸太郎 神道宇高坂次  
天臺伊太郎

## 九州教報

久留米市本泰寺を會場として久留米、大牟田博多所在の日蓮主義者は相會し日蓮主義愛國拿雲研究會を起し五月六日發會式を挙げたり開會の辭 発會の趣意 日蓮主義愛國に就て 出海後義尚は横本村上氏の所感演説ありて盛會なりし

京都教信（五月）

一日 本山の說教

二日 上行寺演説會 金光孝穎升

三日 本山說教 野老監督布教師は昨年東北地方巡教後東海道の一部未だ幾り居りたるを以て十四日本山出發遠州見付に直行せられ漸次四へ巡回せられ月本に大垣を終て歸山せらる詳細は後報すべし

十五日 寿量寺演説會

十六日 本山演説會 金光孝穎升

十七日 久遠寺演説會 金光孝穎升

十八日 本山演説會 金光孝穎升

十九日 久遠寺演説會 金光孝穎升

廿二日 久遠寺演説會 金光孝穎升

廿三日 久遠寺演説會 金光孝穎升

廿四日 久遠寺演説會 金光孝穎升

廿五日 久遠寺演説會 金光孝穎升

廿六日 久遠寺演説會 金光孝穎升

廿七日 久遠寺演説會 金光孝穎升

廿八日 久遠寺演説會 金光孝穎升

廿九日 久遠寺演説會 金光孝穎升

三十日 久遠寺演説會 金光孝穎升

卅一日 久遠寺演説會 金光孝穎升

卅二日 久遠寺演説會 金光孝穎升

卅三日 久遠寺演説會 金光孝穎升

卅四日 久遠寺演説會 金光孝穎升

卅五日 久遠寺演説會 金光孝穎升

卅六日 久遠寺演説會 金光孝穎升

卅七日 久遠寺演説會 金光孝穎升

卅八日 久遠寺演説會 金光孝穎升

卅九日 久遠寺演説會 金光孝穎升

四十日 久遠寺演説會 金光孝穎升

特價郵稅共  
金參拾四錢

日蓮主義を知らんとするものは必ず讀め



# 日蓮主義研究者の絶好資料

## 日蓮 天晴會講演錄 第貳輯

### 本書の内容

- 日蓮上人の尊容に就て 帝室技藝員美術學校教授 竹内久一君
- 日蓮上人の勤王に就て 僧正 大僧正 本多日生君
- 天晴地明に就て 僧正 大僧正 本多日生君
- 富士五山に於ける眞蹟對照の實歷 遺文錄校訂者 稲田海素君
- 非律賓の宗教事情及米國の教育主義 陸軍歩兵中佐佐野口日主君
- 靈格日蓮の愛國心 海軍大佐子爵五島盛光君
- 日蓮上人の筆蹟に就て 宗務總監僧正 井上一次君
- 日蓮主義と細民救濟 法學士子爵五島盛光君
- 將來の宗教としての日蓮主義の各方面 「日蓮主義」編輯長山川智應君
- 高山樗牛と日蓮上人 東京帝大教授文學博士姉崎正治君
- 佐渡前佐渡後 「妙示」「日蓮主義」主筆 小林智學君
- 宗教的訓練 東京帝大講師文學士田中一郎君
- 發行所 東京市淺草區南松山町二九法成寺中（振替口座東京一二一九）
- 取次販賣所 東京市淺草區北清島町一四
- 天晴會事務團

明治三十四年二月廿四日第三種郵便物認可（毎月一回）

（東京三倍印刷株式會社印刷）



### 日蓮上人の高恩

大僧正

本多日生

慈悲に就て

高島平三郎君

藝道の起原に就て

僧正

野口日主

# 統

號七十九百第

（菊版五號活字十四行三十三字詰六百頁版假名附  
裝訂總クロース金文字入御真蹟其他寫眞數葉插入  
○正價金貳圓五百部限・特價金壹圓五拾錢  
○送料内地拾貳錢、清韓卅五錢、臺桿參拾錢

○日蓮主義と實生活 大僧正 本多 日生君

○迫害に對する日蓮上人の態度 東京帝大講師文學士小林一郎君

○日蓮上人の信仰 東京帝大講師文學士本多日生君

○世界統一は誇大妄想なる乎 東洋大學講師高島平三郎君

○織田信長と日蓮宗 大日本史料編纂員文學博士辻善之助君

○日蓮主義と日本君臣の大義 顛本宗大學林教授關田養叔君

○日蓮上人と源光國公 村雲婦人主筆權僧正

○寛戯 西人の法華經觀マスター オガーフ

○日蓮主義と大鹽平八郎 日宗大學長僧正 脇田松森

○軍隊教育と日蓮主義 日宗大學長僧正 脇田松森

○身延記を拜して 近衛第一旅團長陸軍少將大僧正

○大僧正 本多日生君

○大僧正 本多日生君